
赤と青の神話 三章

深江 碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤と青の神話 三章

【Nコード】

N2311Z

【作者名】

深江 碧

【あらすじ】

意識を取り戻したクロフは、間もなくディリアが処刑されることを知る。何とか処刑を止めさせようとクロフは躍起になるが、それもかなわない。そこでクロフはディリアの手をとって、牢屋から抜け出そうとする。

やっと三章です。ようやく半分くらいでしょうか。稚拙なところは多々ありますが、少して楽しんでもらえたら幸いです。

救いの手 1

三章 救いの手

クロフが床から起きられるようになったのは、それから三日後のことだった。

女神官とフィエルナ姫に交代で看病され、クロフはみるみる気力を取り戻していった。

老薬師の目を盗み部屋から抜け出し、クロフが真っ先に向かったのはデイリーアのいる地下牢だった。

牢に来たクロフを見て、デイリーアは不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「何の用だ」

デイリーアはクロフが以前牢を訪れたときと同じように、冷たくあしらう。

「お礼を言っておきたくて」

クロフは苦笑いを浮かべ、デイリーアの鋭い瞳を受け流す。

「あなたが月の神の使者を追い払い、ぼくを助けてくれたのでしょ
う？ ありがとうございます」

「別に」

デイリーアはつまらなさそうに吐き捨てる。

「ありがとうございます」

クロフはもう一度繰り返す。

クロフはかつて湖でしていたように、取り留めのない話をし、デイリーアがそれに相槌を打つ。

牢を去る間際、デイリーアの青い瞳に悲しみが宿っていたのを、その時のクロフは気付かなかった。

「正直、あの女の牢を見回るときは、いつも肝が冷やされます。自分もいつ呪いをかけられるかって」

地下牢の階段へ向かう途中、牢番は大きく息を吐き出した。

遠くで水の流れる音と、囚人の叫びが辺りに木霊する。

「大変ですね」

クロフは何気なく答える。

「そうなんですよ。でも、これも明日までの辛抱です。明日の昼になれば、あの女は広場で処刑されるのですから」

クロフは足を止める。

「いま、何と？」

松明に照らされ、牢番の影がちらちらと揺れる。

牢番はクロフが後ろに付いてこないことに気が付くと、ゆっくりと振り返った。

救いの手2

「へ？ 何がです？」

「彼女が、明日には処刑されると」

牢番は何度も瞬きし、クロフの顔をまじまじと見つめる。

「もしかして、知らなかったんですか？ いま城中、その話題で持ちきりですよ」

「詳しい話を聞かせてくれ」

牢番は腰に下げた牢の鍵束を揺らし、ためらいがちに話し出した。

部屋に戻って来たクロフは、寝台のそばの椅子に座っている人影に気が付いた。

鮮やかな赤い服をまとい、フィエルナ姫はクロフに笑いかけた。

「お加減は、もうよろしいのですか、クロフ様」

フィエルナ姫は柔らかな笑みを浮かべ、クロフを出迎えた。

「ええ、もう大丈夫です。ご心配お掛けしました。いつまでも寝台で横になっていては、体がなまってしまいます。たった今、外の風に当たってきたところです」

「そうですか。それは良かった」

フィエルナ姫は胸元に手を当てる。

クロフはしばしためらった後、真剣な顔つきになる。

「あの、姫。少々お聞きしてもよろしいでしょうか？」

クロフはフィエルナ姫をじっと見つめる。

あまりに真剣な目差しで見つめられたため、フィエルナ姫は恥ずかしそうに頬を赤らめた。

「わたしでお答えできることでしたら」

蚊の鳴くほどの小さな声で、フィエルナ姫は恥ずかしそうに答える。

「単刀直入に聞きます。彼女が、牢にいる魔女が、明日に処刑されるということ、姫はご存じですか？」

クロフは静かだが、怒りさえ感じられる声音で尋ねる。

「え、ええ」

フィエルナ姫は両手を胸の前で固く握りしめ、小さくうなづく。

「では、ぼくが太陽の女神の神託を受け、彼女を探していたということも、姫はご存じなのですね？」

フィエルナ姫はわずかに身じろぎする。

「はい、神官様達に聞いて、存じております」

両手を胸の前で組み替え、フィエルナ姫は小さくうつむいた。

「知っていたのなら、どうしてぼくに彼女の処刑について教えてくださらなかったのですか？ あなたが太陽の女神の神託のことを知っていたのなら、尚更です」

救いの手3

クロフは赤金色の瞳には、荒野を焼き尽くすほどの激しい炎が渦巻いている。

「それは」

フィエルナ姫はうつむいたまま、クロフの目から視線をそらす。

「何をしている」

鋭い一言が部屋に響き、辺りは再び静まり返る。

クロフがそちらに視線を向けると、部屋の扉の前にロキウスが杖を手に立っている。

戸口に立つロキウスは、クロフとフィエルナ姫を順に見比べる。

二人のいる方に早足で駆け寄り、ひたすら縮こまっているフィエルナ姫を見て取ると、射るような目付きでクロフをにらみつける。

「文句なら、俺が聞こう。姫に八つ当たりするな」

フィエルナ姫は軽く会釈すると、戸口の方に小走りに駆けていった。

フィエルナ姫が扉の向こうに消えたのを確認して、ロキウスは切り出した。

「お前が魔女のことで言い分があるのはわかる。だからあらかじめ、姫に話さないよう頼んでおいたのだ。本当ならば魔女の処刑が済むまで、お前をこの部屋から出さない約束だったのだが」

ロキウスは冷ややかな目差いでクロフを見つめる。

「わかっているのか？ 彼女は太陽の女神の神託にある人だぞ。彼女を処刑したら、どんな神罰が下るか」

ロキウスはクロフの怒りをものともせず、氷のように冷たく言い放つ。

「だが、あの女は多くの人々を殺し、苦しめ、広大な土地を腐らせた魔女ではないか。そんな女に、太陽の女神の恩寵があるものか。それに処刑しろと命令したのは、おれ達神殿側の人間ではない。そ

れを決めたのは、ここに暮らす国民達だ」

クロフは愕然とした。

頭の片隅ではわかつていたことだったが、いざ実際に目の前で言われると、強い気持ち揺らいだ。

クロフは唇をかみしめ、何も言わず部屋を走り出た。

クロフは廊下を走り、国王の部屋へと向かう。

デイリーアの処刑をやめさせたい一心で、兵士が止めるのも聞かず、部屋へ飛び込んだ。

部屋には南の王と数名の家臣、周りを固める兵士達、そしてクロフの世話をしてくれた女神官がいた。

彼らは話を中断し、息を切らせ部屋に飛び込んできたクロフを一斉に見つめた。

「騒々しい。部屋で静養していたはずのお前が、どうしてこんなところにいる？」

一番奥の椅子に座っていた南の王があごに手を当てる。

クロフは慌てて礼の姿勢を取る。

救いの手 4

「突然の訪問、失礼いたします。しかし王様に急ぎお願いしたいことがありまして、こうして参った次第でございます」

周りにいた家臣達が口々に叫ぶ。

「何と無礼な」

「こんな者の言うことなど、聞く必要はございません」

「さつさと部屋へ戻れ。我々は忙しいのだ」

家臣達を片手で制し、南の王は大きくうなずく。

「いいだろう。お前の言い分を聞こう。その願いとやらを申ししてみよう」

「ありがとうございます」

クロフは頭を低く垂れた。

「実は、明日の魔女の処刑の件でお願いがあつて参ったのです。明日の魔女の処刑は、取りやめていただけないでしょうか？」

周囲にいた家臣や兵士達がざわめいた。

女神官は冷淡な瞳でことの成り行きを見守っている。

「なぜだ？ お前も知つての通り、あの魔女が処刑されるのは当然の処罰だと思うが」

クロフは顔を上げ、赤金色の瞳で王をひたと見据える。

「はい、わたしもそれに異論はございません。しかしあの魔女は太陽の女神の神託に示された方。人の手で処刑をすれば、この地にとんな災いを招くかも知れません。そこであの魔女の処罰は、わたし達神殿に任せてもらえないでしょうか？」

南の王は傍らにいた女神官に目配せをする。

女神官はクロフの前に進み出た。

「今回の件は、神殿の大導師様にもご相談したのですが、大導師様はこちらで処罰するのが妥当であると判断されました。たった今、早馬で報告が来たところです」

女神官は静かに言い放つ。

「しかし」

クロフはなおも食い下がる。

「しかし、それにしても処刑が早急すぎるのではないですか？ もっと詳しく罪状を調べる必要が」

「その必要はない」

家臣の一人が口を挟む。

「死んでいった者のためにも、農地を追われた農民のためにも、また国民すべてのためにも。魔女の処刑は早急に執り行うべきだ」

別の家臣が後を続ける。

「民達の悲しみ、苦しみ、苦しみを取り除くためにも、魔女の処刑は必要なのだ」

救いの手 5

「処刑が執り行われて、初めて彼らの心は癒される」
年老いた家臣が白いひげをしごきながらつぶやく。

「他に言い分はあるか？」

南の王の重苦しい声が響く。

クロフは片膝を付いたまま、うつむき拳を握りしめた。

「ありません」

クロフはかろうじて声を絞り出し、爪が手のひらに食い込むほど強く握りしめた。

「失礼しました」

吐き捨てるようにつぶやき、王に十分な礼も取らないまま、クロフはその部屋を後にした。

クロフは暗い気持ちのまま、廊下を歩いていた。

うつむき今にも倒れそうな青白い顔で歩いていたので、すれ違った人々は目を見張り、進んで声をかけようとする者はいなかった。

「おい！」

行く手を阻むように腕が差し出され、クロフはぼんやりと顔を上げる。

目の前にはロキウスが不機嫌な顔で立ちはだかっている。

「突然部屋を飛び出したから、心配してきてみれば、案の定だな。

あの魔女のことなら、もう諦める。王に異議を申し立てても、今更判断は覆らない」

クロフは黙ってロキウスの脇をすり抜けた。

「あの女のこととはもう忘れる。お前は神託の通りに行動した。今更お前を責める者などいない。太陽の女神様も、神託の通りに行動したお前をお許しになるはずだ」

「うるさい」

クロフは吐き捨てるようにつぶやく。

「神託、神託つて、ぼくがそのためだけにここまで来たと思っ
てるのか？ 神殿ですつと一緒に育ってきたお前まで、ぼくがそれだ
けの理由でここまで来たよ、本当に思っているのか？」

クロフはロキウスをにらみつける。

その赤金色の瞳には、怒りとも諦めとも付かない感情が浮かんで
いる。

「神殿にいた頃、ぼくがどんな気持ちでいたか、太陽の女神様の神
託を受け、火の神の生まれ変わりとしての宿命を背負わされた子供
がどんな気持ちでいたか、一緒にいたお前でさえ本当のところはわ
からなかったというわけか」

ロキウスはクロフの静かな怒りに気圧され、わずかにたじろいだ。
「神殿の中でも神々の声を聞き、人には見えないはずの使者の姿が
見えることが出来る人間は数少ない。それに加え、他の生き物と話
が出来、詩も唱えず神々の奇跡を自在に操ることが出来る者など、
今では万に一人いるかどうかだ。それをどうだ、生まれながらに太
陽の女神様の寵愛を受け、軽々と神々の奇跡が行える子供が平民に
いる。果たして周りの人々はその子供をどう思うか。平民風情がと、
気に入らない人間もいるだろう」

クロフは深いため息を吐き出した。

「ぼくが子供だったからと言って、神殿内の出来事を何も知らない
と思っっているのは間違いだ。ぼくは知っている。それを巡り神殿内
でどんな争いが起こり、どれほどの心ある無実の人間が罰されたか
を」

クロフは悲しげに微笑み、ロキウスに背を向け歩き出した。

「動物や木々の言葉がわかると言うことは、人々の感情にことさら
敏感ということなんだ」

それだけ言うと、クロフはロキウスを振り返らず、逃げるように
早足で歩き去った。

救いの手 6

部屋に戻ってきたクロフは、寝台の上に座り炉ばたの炎を見つめてぼんやりとしていた。

頭に浮かぶのは今牢にいるデイリーアのことばかりだった。

気が付けばふらふらと部屋を出て、地下牢の方へ歩いていった。

クロフが地下牢にたどり着くと、牢番は牢の前にはいなかった。階段から下りた突き当たり、牢番の詰め所で蜜酒を酌み交わしていた。

口々に明日の魔女の処刑を喜び、その声がクロフのいる階段のところまで聞こえてくる。

クロフは牢番の詰め所に顔を出さず、さっさと奥の牢屋へと歩いていった。

デイリーアがいる牢の前にたどり着いたクロフは、背を向けて石の床の上に横たわっている人影を見つけた。

クロフが声をかけようとしたためらっているうちに、人影がもそもそと動き起きあがった。

「またお前か。まだわたしに何か用があるのか？」

デイリーアは眠りを邪魔されたためか、大きなあくびをかみ殺す。

「ごめん」

クロフは素直に謝った。

「でも、今夜中に聞いておきたいことがあったんだ」「何だ？」

デイリーアは気だるそうに石の上にあぐらをかく。

クロフは長い間ためらってから、やっと口を開いた。

「あなたは、この牢から出たいと思わないのですか？」

クロフの問いに、デイリーアは首を傾げる。

「つまりその、あなたなら、水を自在に操るあんなすごい力を持っているのなら、逃げられるはずです。そうしないのはどうしてですか？」

デイリーアの虚ろだった青い目に生氣が戻ってきた。

「確かにお前の言うとおり、牢を出ようと思えば出られないこともない」

「では、どうして」

クロフの言葉は最後まで続かなかった。

デイリーアの射るような鋭い瞳に、途中で遮られた。

「牢を出て、ここから逃げて、それでどうする？」

デイリーアの泉の底のような青い瞳には、有無を言わさぬ強い輝きが宿っている。

「わたしが牢を逃げ出すには、恐らく牢番を殺さなくてはならないだろう。手向かう兵士達も殺さなければならぬ。国民をすべて敵に回さなければならぬ。それでどうする？ この先どこへ逃げるのだ？」

「それは」

クロフには答えられなかった。

何よりもデイリーアの冷たく悲しげな瞳に射すくめられた。

「国民と神殿の人間を敵に回して、わたしにどうしろと言うのだ？ わたしが城に連れてこられてから、あの森も焼き払われたと聞く。一体わたしにどこへ行けと言うのだ？ わたしには帰る場所も、迎えてくれる家族も友人も、もう何も無いというのに」

デイリーアはうなだれ、腕に顔を埋める。

クロフも沈痛な表情でうつむいた。

「でも」

絞り出すようにクロフは声を張り上げた。

「でも、逃げないと、あなたは明日の正午、広場で処刑されてしまう。それでもいいのですか？」

デイリーアは伏せていた顔を上げ、クロフを見上げる。

「知っていたさ。そんなこと」

吐き捨てるようにつぶやく。

「森にいたときから、お前に初めて会ったときから、いやその前からずっと、覚悟していたさ。何者かがわたしの命を奪うことを。いつかわたしがお前に殺されることを」

「そんなことは！」

クロフは口ごもった。

デイリアの言葉を否定するはずが、続く言葉が出てこない。

「そんなことは無い、か？ そうだな、お前が直接手を下したわけではないからな。だが結果的には変わらない。お前が、神殿の人間が来たせいで、わたしは森から追い出され、森を焼かれ、今ここにこうしている」

クロフはうなだれたまま、黙ってデイリアの言葉を聞いていた。どういふ言葉を並べても、デイリアに詫びることは出来ないと考えたからだ。

「まあ、仕方がない。これがわたしの招いた結果ならば、責め苦を負うのはわたし一人でいい。気楽なものさ」

「ごめん」

クロフは鉄格子を両手でつかむ。

「本当に、ごめん」

クロフは石の床にひざまずき、深く頭を垂れる。

「気にするな。お前が気にしてどうにかなることでは無いのだ。これがわたしの運命だったのだ。お前が気に病む必要はない」

デイリアはクロフの鉄格子をつかむ手に傷だらけの細い手でそっと触れる。

「わたしのことは忘れ、お前は神殿に戻れ。そしてお前の力を万民のために役立てる。なあと、お前ならば良い神官になれるさ。わたしが保証する」

デイリアの青い瞳が優しく細められる。

クロフはその微笑みに目を奪われた。

それはクロフの中で強い意志の炎を新たに灯らせ、燃え上がらせ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2311z/>

赤と青の神話 三章

2011年12月13日09時55分発行